

わかやま母親通信

第99号 2022年12月8日発行

発行 和歌山県母親大会連絡会 事務局 和歌山市小松原通3の20 和歌山県教育会館内
和教組 TEL073-423-2261 FAX073-436-3243 母連メール：w_haharen@wkn.or.jp

生命を生み出す母親は
生命を育て
生命を守ることをのぞみます

12.8母親・女性たちの平和行動～全国で 県下各地で～ HP 和歌山県母親大会

再び 戦争する国への道は、許さない

ロシアのウクライナ侵略を利用するかのようになり、岸田政権は、軍事費を5年以内にGDP2%（今の倍増）にするといっています。10兆円を超す額になります。憲法改定についても、「喫緊の課題」として、きわめて前のめりの姿勢です。

今年の12.8平和行動は、「軍備拡大による戦争準備ではなく、9条を力に平和外交を」と、今まで以上に声を大にして街頭宣伝に取り組みましょう。

第67回日本母親大会 in 埼玉・群馬に参加して…分科会の感想② 問題別集会1「いま、平和を考える」

*ウクライナ問題は決して他人ごとではなく、米国が日本各地にミサイル200弾？を配置する予定だと言っていることに懸念し、その前にウクライナ戦争を終わらせ、ロシアへの統合を阻止することを最優先とし、止められることが、今後の米国と我が国の関係につながっていくと思います。とにかく、国民で意識できるように、知らせていくことが大切だと思い、母親大会の大切さを改めて感じました。 那賀 M. T.



*私は保育関係の仕事をしています。直接的にメディアや政治に働きかけはしにくいですが、子どもたちに「戦争のない平和の大切さ」を日々の生活の中で教えていきたいと思いました。世界の人々が平和で自由に過ごせますように!! 伊都 会場参加者

明日へ

埼玉・群馬大会に全国から集まった参加者は、みんな3年ぶりのリアル開催の高揚感にあふれていました。参加者の波に合流すると、エネルギーがチャージされていく気がしました。母親大会の不思議な力ですね。

10月15日、自宅前のバス停を6時29分に出発。特急はるか、新幹線を乗り継ぎ、開会30分前に会場に到着したにも関わらず、さいたま市民ホールの問題別集会3の大会場は、前半分はすでに埋まり、後ろの方も空席はわずかでした。みなさんの関心の高さが伺われます。途中に発表された会場参加者は250人、オンラインは450人とのことでした。教室のような長机の配置で、ノートテイキングが楽でありがたかったです。(感想は2Pに)

全体会の講師が田中優子さんというのも大変魅力的でした。分科会、全体会の講師陣を見ても、母親大会の問題意識の所在の確かさとパワーを感じた2日間でした。 S.Y.

問題別集会2「ジェンダー平等社会の実現」

*1985年に、「女性差別撤廃条約」を批准しながら、なかなか前に進まないジェンダー問題。「何だろうね～」と思っていたのがとてもすっきりした。「選択議定書」を批准しないことには、ジェンダー平等が実行推進されないんだということが分かった。地方議会への取り組みが力になるんですね。
和歌山市 T. Y.

問題別集会3「気候正義を求める」

県役員 S. Y. (会場参加)

*ダイビング歴45年の武本さんのお話では、急速に進む日本近海の珊瑚の無残な白化の映像があり、会場から驚きの声が上がりました。「プラスチックスープの海」のニュースを見ない日はありませんが日本近海で頻発する赤潮の発生や、昆布、ひじきがなくなる磯焼けは、化学肥料大量投与の持続不可能な農業で土を痛めつけたことが原因であるとのことで、私たちの活動そのものを急いで大転換させなければならない時に来ているのだと思いました。

気候アクティビストの名取由香さんのお話からは、「洪水よわが亡きあとに来たれ」と、都合の悪い事実にはできれば目をつぶっていたくて、日頃意識から遠ざけていた厳しい現実を改めて突きつけられました。そして、「1.5℃の約束」から逃げるのでもなく絶望するのでもなく、「まずはみんなに知ってもらおう」と行動を始めた若い名取さんに応えなければと強く思いました。

*プーチンがなりふりかまわず予備兵(でしっけ?)を集め出したとき、ロシアの母親が「息子の命は渡さない」と叫ぶのをテレビで見ました。世界母親大会が開かれるといいな。
県役員 K. F.



第67回日本母親大会 in 埼玉・群馬に参加して…全体会の感想②

*講演に目を開かされました。日常の中で当たり前になっている諸事に、私たちは常に学習して気づき、行動することの大事、個人の人権、自分だけでなく、他の人々、周囲の人々、世界の人々に、常に目を向け、進んで生きていく大切さを分かりました。

海草 S. Y.

*講師の語り口が、理屈っぽい話も無理なく聞けました。女性史を振り返ってみて、日本古来とか伝統とか言われることが、為政者のまやかしであることが良く分かりました。「社会的自己肯定感」より「基本的肯定感」多様性を認めることは幸せな人が増える事。すごく納得でき、もっと聞きたかった気がします。

有田 Y. Y.

*「核戦争から子どもを守りましょう」というスローガンを掲げて、母親大会が始まり、続いているのが嬉しい!!67回だって!秋田、愛知、石川など3回参加し、沖縄に絶対行こうと思っていたのに残念ながらコロナで中止。今日は、田中優子さんのお話が聞いて嬉しかった。こんな世界の情勢の中で、一生懸命考えて、未来に生きる小さな人たちの生命を守るために行動したいという気持ちがまたふつふつと湧いてきました。すべての人に自由を!今、母親大会のアピールに拍手しました。

西牟婁 N. Y.

*講演を聞き、日本国憲法のすばらしさを改めて再認識した。日本国憲法を守り現社会へ生かすよう実践していこうと思い、憲法改悪にも反対していこうと改めて思いました。地域の文化に、リモートを通じて浸ることができました。

日高 S. K.

「ジェンダー平等社会」の実現をめざして・・・ベーシック学習講座③

…それは、平和、自由、平等、多様性が尊重され、個人の尊厳が守られる社会

戦後 70 数年がたった。この間の文明の発達著しく、生活様式も人間関係さえもすっかり変わってしまったように思える。夫婦も 3 世代程替わっているのではないだろうか。女性の社会進出は進み、共働き家庭が増えている。

ところが、今回のコロナ禍でのステイホームやテレワークの中で、女性の家事負担が増え、夫からのDV被害も起こるなど大変な思いをしているのだ。

日本の固定的性別役割分担意識は、代々引き継がれ根強く残っている。「男は仕事」「男らしく」との社会的要請と同時に、男性優位の風潮や仕組みが温存されている。たとえ共働きであっても、相変わらず家事と育児は女性が担っていることが多い。また今も「うちの主人が…」「ヨメが…」「家内が…」と言った言葉が慣習的に使われることも少なくない。データを見てみよう。



- 結婚で男性の姓 96%
- 結婚・出産で退職する女性比率…50%
- 男性の育児休業取得率…7.48% (女性 83%)
- 賃金の男女 10 対 7
- 夫の家事労働平均時間…49 分 (女性 3 時間 45 分)

こんな実態や古い意識を変えていく上で、行政の適切な啓発活動や子育てをフォローする諸制度・労働環境の改善など、積極的な政策が大切なのだ。

日本政府は、国連の女性差別撤廃条約(1979年採択)を1985年に批准し、男女共同参画局を設置して推進してきているように見えるが、一向に効果が見えずパフォーマンスだけかとさえ思えてくるのである。実際、「選択的夫婦別姓制度」についての国会論議は 20 年以上放置したままであり、「同性婚」も認めず、「LDBT 平等法」も全会派での法案提出を見送ってしまっている。(この間、自民党と統一協会の深いつながり、政策への強い影響力が明るみになった。本当に「許せない」の一言に尽きる。)

経済界は、政府から労働規制緩和策を引き出し、安価の労働力を過労死寸前のところまでこき使って空前の内部留保を溜めるに至っている。その上、女性を低賃金・非正規労働で雇い、景気の調整弁に利用しているのである。

これがこの 30 年の国内状況である。ジェンダー平等社会の実現に向けて政策的に本気の実行や取り組みや努力を重ねた国が、女性の政治参加や経済・社会進出を進め着実に成果を上げている(注2)のに対して、日本のジェンダー平等の歩みが遅々として進まず、世界に水をあけられるに至った重大な要因だと考えられる。

(注2)

ジェンダー平等は経済力アップにつながる？ アイスランドに学ぶ、誰もが生きやすい社会のヒント「2022・3・3 Yahoo! JAPAN SDGS」より

- 13 年連続「ジェンダーギャップ指数 1 位」で、国会議員の男女比率は半々である。
- 2018 年、世界初の「性別による賃金格差を禁止する」法律を施行した。

- ・実効性のある法整備とともに、インフラ整備が重要であると考え、誰もがすぐ入園できる、質が高く比較的安い保育園や幼稚園を充実させている。
- ・育児休業制度は、女性6か月＋男性6か月＋共有可能6週間としている。男性の育児休業取得は、現在7割を超えている。
- ・国民の意識が変わったのは、1975年10月の「女性のストライキ」であった。女性も社会の柱であることを証明するために、仕事や家事をストップして首都の広場に集まった。その結果、社会も家庭もうまく機能しない状態が認識された。
- ・1980年に、世界初の女性大統領が選出され、16年間就任した。その後、女性だけの政党が自治体にも国会にも誕生した。
- ・2009年には閣僚比率を半々とし、その時の女性首相は、レズビアンを公言し、社会がそれを当たり前を受け入れた。(あらゆる人が平等に機会を得られる社会へ)
- ・性別を問わず人権がきちんと認められる社会は、意思決定の場に多様性を発揮する。また国民の幸福度が上昇し、家庭が幸せであることが結果的に経済効果をもたらす。

国中の女性がストライキを起こした日。1975年、アイスランドの「女性の休日」【画像集】

アイスランドの歴史に残る、女性たちの運動。「ハフポスト日本版」坪池順。2021年03月08日



1975年10月24日、男女の給与格差や性別の役割分担に抗議し、アイスランドで国中の女性がストライキを起こした。仕事や家事をやめた女性たちは、街に出て集会などを開催。国の女性の約9割が参加した。首都レイキャビク中心部の広場ライキアルトルグはストライキ参加者で埋め尽くされた。



1975年10月24日、9割の女性が参加した「女性の休日」ストライキ



「平等闘争＝階級闘争」と書かれたサイン



この日をきっかけに、アイスランドでは女性の政治参画が発展。1980年にはヴィグデイス・フィンボグドゥティル氏(上)がアイスランドだけでなく、世界で初めて民主的な選挙で女性大統領となった。現在のアイスランドのジェンダー平等への取り組みは様々な分野におよぶ。公共の委員会や上場企業の取締役会にはジェンダークォータ制があり、男性の3ヶ月の育児休業の取得を法律で定めている。